

# キュウリの摘心栽培に関する研究

## 第1報 抑制栽培について

高橋英生・野間 史・岡迫義孝

(宮崎県総合農業試験場)

TAKAHASHI, H., NOMA, F. and OKASAKO, Y.

Studies on the Topping Culture of Cucumber in Plastic-Houses.

(I) Cultivation from Autumn to Winter.

キュウリのハウス栽培は1戸当たりの面積が増加して、省力化の方向へと進んでいるが、誘引労力の省力化と短期増収のために、キュウリの摘心栽培法を作型別に検討中である。今回は抑制栽培について報告する。

### 1. 試験方法

栽植密度と摘心節位を組合わせ、第1表に示す各区を設けた。供試品種は「久留米落合H型」、定植は10月8日、12月上旬より12℃を目標に加温栽培をおこなった。

### 2. 試験結果および考察

#### (1) 側枝の発生

節位別に側枝の発生をみると、子づるは節位により強弱はあるが試験区に関係なくほぼ均等に発生し子づるは5~7節付近と適心節位付近の子づるに多く発生した。株当たり側枝数は摘心節位が高い場合と粗植の場合に増加したが、粗植による側枝数増加は株数減少による減少をおぎなうほど大きくはないため、単位面積当たりの側枝数は密植区ほど多かった。

#### (2) め花着生と着果

め花の着生数は子づる、孫づる数に比例し、高節位摘心あるいは密植の場合に多かった。収果率は粗植ほど高かったが、孫づるでは摘心節位が高くなると収果率の低下がみられた。

#### (3) 収量と品質

総収量のうち側枝からの収量が80~90%を占めたが、このため株当たりの収量は粗植ほど多収となった。なお密植の場合は高節位摘心による増収はみられなかった。単位面積当たりの収量は株当たりの収量の差より、栽植株数の影響が大きく、本試験の範

囲では、密植ほど多収となったが、1㎡当たり3.0株植と2.4株植との差は小さかった。摘心節位との関係では、密植の場合は18節摘心が、また粗植の場合は数値に乱れがあるが、摘心節位が高いほうが多収となった。なお1㎡当たり3.0株植の場合、うねの中央に1条植にして1列仕立とするよりも、うねの両側に振分けて2列仕立とするほうが多収となった。品質については、栽植密度や摘心節位による差はみられなかった。

摘心栽培では、側枝の発生が多くなるので、粗植の必要があるが、過度の粗植は上述のように減収となり、18節程度の摘心では1㎡当たり2.4~3.0株植が適当と考えられ、さらにこのような栽植密度の場合は、1うね2列仕立とするのがよいと考察した。

第1表 側枝の発生および収量

株数 /㎡	摘心 節位	株当たり側枝数			1㎡当たり側枝数			株当たり収量			a当たり収量		
		子蔓	孫蔓	計	子蔓	孫蔓	計	個数	重量 (kg)	全 指数	個数	重量 (kg)	全 指数
3.0	16	11.8	6.5	18.3	35.4	19.5	54.9	22.8	1.77	71	6,845	531	88
	16*	11.6	5.8	17.4	34.8	17.4	52.2	26.7	2.08	83	8,010	624	104
	18*	13.7	5.9	19.6	41.1	17.7	58.8	25.2	2.10	84	7,565	630	105
	20*	14.3	6.4	20.7	42.9	19.2	62.1	24.6	1.92	77	7,380	575	95
2.4	16	12.0	6.4	18.4	28.8	15.4	44.2	30.0	2.29	91	7,191	549	91
	18	13.9	8.3	22.2	33.4	19.9	53.3	31.5	2.51	100	7,571	603	100
	20	15.3	6.5	21.8	36.7	15.6	52.3	32.4	2.48	99	7,771	594	99
1.8	16	12.4	8.2	20.6	22.3	14.7	37.0	35.7	2.81	112	6,420	507	84
	18	14.4	9.4	23.8	25.9	16.9	42.8	37.9	2.95	118	6,830	532	88
	20	15.0	9.8	24.8	27.0	17.6	44.6	33.4	2.58	103	6,005	464	77
	22	17.8	7.8	25.6	32.0	14.0	46.1	37.9	3.14	125	6,816	566	94

註) \*印は1うね2列仕立, 他は1列仕立。